



OVERSEAS

Republic of Indonesia

— インドネシア共和国 —

海外事情



インドネシアの素顔



小槻 倫子 OTSUKI Noriko

国際航業株式会社 / 公共コンサルタント事業部 / 海外コンサルティング部

カリマンタン・バリクパパン市

インドネシア共和国は日本と経済的な結びつきが強く、バリ島やボロブドゥール遺跡など観光資源も豊かであるため、行ったことのある方も多いと思います。しかし、東西の総距離が5,000kmに渡る島国ですので、地域により、島により、文化も暮らしぶりも様々です。本稿では、以前にカリマンタンのバリクパパンという町を仕事で数回訪れていたことを思い返しつつ、インドネシア事情を紹介いたします。

インドネシアの概要

インドネシアの人口は現在、世界第4位の約2億7,000万人。世界最大のイスラム国家であり、G20の参加国でもあります。2045年の先進国入りを長期目標に掲げており、近年の発展は目覚ましく、国際舞台に台頭してきている新興国の一つです。そんなインドネシアの建国の歴史には日本が大きく関わっています。詳細は関連書籍をご覧ください。そして、現地滞在中に日本との歴史的な関わりが感じられたことを二つご紹介

いたします。

一つは、8月が近づくにつれ、独立記念日を祝う装飾や横断幕が町中に見られるようになることです。インドネシアの独立記念日は8月17日。もちろん、日本の終戦記念日の直後であることは偶然ではありません。インドネシアの独立に関しては現在まで多く語られてきましたが、そのことを含めて、私にはインドネシア国旗の赤と白を基調とした町中の飾り物が両国の深い繋がりを思い起こさせてくれました。

もう一つは、インドネシアのどの町でも、RT (エル・テー) あるいはRW (エル・ウエー) と呼ばれる末端の住民組織が日常生活に大変重要な役割を果たしていることです。RTとは数10世帯からなる近隣住民のグループで、いくつかのRTがまとまってRWを構成しています。工作上、住民の方々から話を伺ったり、住民の協力を仰いだりすることがあり、そのたびにRTやRWの組織力には驚かされたのですが、RTやRWの制度化には日本占領期に導入されていた隣組が起源になったと言われています。こんなところにも、



インドネシア・バリクパパンの位置 (Natural Earth (https://www.naturalearthdata.com/) のベースマップ利用)



リハビリテーションセンターにてこちらを見つめているオランウータン



バリクパパン市のシンボルマークにもなっているマレーグマ



日本とインドネシアとの長きに渡る縁を感じずにはられません。

自然の楽園カリマンタン

カリマンタンはジャカルタのあるジャワ島の北部にあり、グリーンランド、ニューギニア島に次いで世界で3番目に大きな島です。ボルネオ島という名前の方がピンとくるかもしれませんが、島の北部には小さな王国「ブルネイ」があり、これを囲むよう

にマレーシア領のサバ及びサラワク州があり、そして南側の3/4ほどがカリマンタンと呼ばれるインドネシア領となっています。

赤道直下のカリマンタンは、多くが熱帯雨林に覆われ独特の自然資源を有しています。1980年代ごろから、大規模な違法伐採問題が国際的にも注目を浴びており、いかにその豊かな生態系を保護していくかが問われています。

カリマンタンの自然資源のなかで特によく知られているのは、オランウータンでしょう。熱帯雨林の樹上で、イチジク、ドリアンなどのトロピカルフルーツや昆虫を食べて暮らしています。後ほど紹介するバリクパパンには、住みかを追われたり親とはぐれたりしてしまったオランウータンのリハビリテーションセンターがあり、野生さながらの彼らの暮らしぶりが見学できるようになっています。私が訪れたときには、川の向こうの遊具でゆったりと遊んだり寝そべったりしている彼らが見えたのですが、ふと目が合って見つめ合っていると、私たちが彼らを見学しているのではなく、実は彼らが我々を観察しているのではないかと、不思議な感覚にとらわれました。

もう一つの人気動物はマレーグマです。体長は100～140cm、体重25～65kgと最も小型のクマで、バリクパパン市のシンボルマークにもデザインされています。首元の淡いオレンジの模様はツキノワグマを連想させますが、片やそれを「月」と



海が見える高台からのバリクパパンの眺め

見るのに対し、こちらは英語で Sun Bear と言い「太陽」に見立てているところは対照的で興味深いです。

バリクパパンという町

バリクパパンはカリマンタン島南東部にある港町です。人口は80万人ほどで、国内では20番目くらいの規模になります。鉱物資源や石油が産出されることから、戦時中は激しい戦闘も繰り広げられたと聞きます。平地は海岸沿いのみで坂が多く、高台から海を眺めると遙か遠くに石油掘削施設や大型船が霞んで見られます。天然資源のお陰で経済的には比較的裕福で、また、イスラム教の信仰心が篤いことでも知られています。そこここにモスクがあり、ふと気づくと人々を礼拝へと誘うアザーンの声がよく聞こえてきました。初めてのころは耳障りに思うこともあったアザーンですが、毎日聞いているうちに信仰はなくなると心地よい響きを感じるようになりました。

仕事で一緒した方々は、仕事の合間に礼拝を行ったり、週末にはモスクでの講話を聞きに出かけたり、

あるいは断食月（ラマダン）ではなくても自ら「断食の日」を決めて断食を行っていたりと、毎日の暮らしが信仰とともに営まれていました。そのためでしょうか、町全体も穏やかで落ち着いた雰囲気がありました。

民族と文化の多様性

インドネシアの国民の多くはマレー系ですが、種族の数は全部で300にも上ると言われており、文化も多種多様です。



バリクパパン模様のバティック



ダヤクビーズの財布

特産品であるバティック（ろうけつ染め）のシャツやタペストリーをお持ちの方も多いでしょうが、そのバティックの模様には地域ごとの特徴があるのをご存知でしょうか。例えば、バリクパパンのバティックには唐草模様に似たタコのような模様があしらわれています。見る人が見れば、バティックの模様からどの地域のシャツかを言い当てることのできるようです。バリクパパン市役所では毎週木曜日はバティックを着る日となっていて、生まれ故郷や旅先で買ったものなど、皆が好みのバティックに身を包み、オフィスが色とりどりになります。ちなみに、月曜日は制服の日、水曜日は白いシャツの

日となっていました。

また、カリマンタンにはダヤク族という先住民族が暮らしています。近代の文明とは距離を置いて独自の言語、習慣、文化を守り、狩猟や焼き畑を生業とする彼ら固有の文化の一端は、その伝統工芸であるダヤクビーズと呼ばれるビーズ細工に見ることができます。ダヤクビーズのバッグや財布は土産物として人気があり、独特な色遣いで彩られた幾何学模様は、素朴ながら神秘的でもあります。

豊かな食文化

最後に、海外情報としては欠かせない食文化について触れたいと思います。インドネシアの食と言えば、ナシゴレン（焼き飯）、サテ（串焼き）、ガドガド（ピーナツソースで和えたサラダ）などがよく知られています。汗が噴き出るように辛い料理もたまにありますが、日本人と見るや辛さを抑えてくれるお店も多く、私たちには食べやすい料理がほとんどです。日本のレストランチェーン店も多数進出していますが、インドネシア文化に馴染むようにアレンジされたメニューには、多少面食らうこともしばしばです。

フルーツの種類が豊富で安いのも魅力の一つです。果物の王様とも呼ばれるドリアンは、その季節になると道端に多く出現する露店にずらりと並びます。当たりはずれがありますが、店先で実を割って試食をさせてくれて、気に入ったものを買うことができます。

そういうわけで無難な食生活を送ることは簡単ですが、たまには新しいメニューに挑戦しようという地元の方に連れて行ってもらったのがオックステールスープのお店。ホロホロとろけるような肉と野菜がたっぷり



ドリアンの屋台にて



オックステールスープ

のスープに、竹筒か何かのような直径3cmほどの骨が器からはみ出さんばかりに入っており、ストローも添えられています。このストローを骨の中に突っ込んで、骨髄を吸い込むというわけです。すっかりスープに溶け込んでしまったのか、「これぞ骨髄」らしきものは吸い込めなかったのですが、命の恵みを有難く堪能しようという食文化を満喫しました。

より良好な二国間関係を願って

日本とインドネシアは海洋国家で

あること、多様性の中にも協調や和を尊重する国民性であることなど、多くの共通点があります。またどちらも、地震、火山、地滑りなどの自然災害に見舞われやすく、社会のレジリエンス（回復力）の強化という共通の課題があります。今後は従来の援助する側・される側という関係を超えて共に高めあうパートナーとして、より強固な関係が構築されていくこと、そしてその中で私も微力ながら貢献できることを、心より願っています。